

インクル

創刊3号

財団法人 共用品推進機構
〒101-0064
東京都千代田区猿樂町
2-5-4 OGAビル 8階

"Incl." by The Kyoyo-Hin Foundation



(イラスト：牧内 智子)

目次 / Contents

特集：「共用品推進特別賞」と「共用品が開く未来展」

- ・初の「共用品推進特別賞」を決定！
共遊玩具「小さな凸の提案」など12事例（青木 誠） 2
- ・受賞12事例の顔ぶれ 4
- ・「共用品が開く未来展」、ここが見どころ！
吉村 政昭・実行委員長に聞く 7
- ・「共用品が開く未来展」マップ 8
- ・国際福祉機器展で「共用品」をアピール 10
- ・ISOコボルコトロント会議・速報（高橋 玲子） 11
- ・『ドラえもん的車いすの本』、小学館から刊行（森川 美和） 12
- ・キーワードで考える共用品講座
第3講：共用品とコンセプト（後藤 芳一） 14
- ・点描・インクルの微笑み
ラフカディオ・ハーンが愛用した特注机 15
- ・「インクル」からのお願い 16

共用品が開く未来展
共用品展

共用品が開く未来展
11月5日(土) 12:00-18:00
11月6日(日) 10:00-18:00
11月7日(月) 10:00-18:00
11月8日(火) 10:00-18:00

会場：銀座ソニービル 8F ソニードホール
〒100-0001 東京都中央区銀座4-1-1

入場料：無料

共用品が動くビジネス未来展
11月5日(土) 12:00-18:00
11月6日(日) 10:00-18:00
11月7日(月) 10:00-18:00
11月8日(火) 10:00-18:00

主催：財団法人 共用品推進機構
協賛：共用品推進機構、共用品推進機構、共用品推進機構、共用品推進機構、共用品推進機構

「共用品が開く未来展」開催
11月5～8日 東京・銀座ソニービル

特集 初の「共用品推進特別賞」を決定！

共遊玩具「小さな凸の提案」など12事例、11月の「未来展」で展示

青木 誠 (個人賛助会員、(財)共用品推進機構運営委員)

(財)共用品推進機構が選定・授与する「共用品推進特別賞」の表彰事例が決まった。同賞は「共用品・共用サービス」の開発・普及に貢献のあった事例を発掘して表彰するもの。第1回目となる今回は、共遊玩具「小さな凸の提案」や家電製品の「バリアフリー化への取り組み」など、先駆的な12事例を選出した。10月25日に東京・千代田区の学士会館で記者発表したのに続き、11月5日から4日間、東京・銀座ソニービルで開催する「共用品が開く未来展」で展示、一般来場者に紹介する。

(財)共用品推進機構ではその使命の1つとして、共用品・共用サービスの普及促進の趣旨に照らし優れた製品・サービス、あるいは取り組み事例を選定し、啓発事業の一環としてこれを顕彰することを掲げている。「共用品推進特別賞」はその最初の試みとして実施したものである。

これにより、消費者および企業関係者らの共用品・共用サービスに対する理解と関心を深め、ひいては生活と産業の質的向上に資することを、目的とし

ている。

「標準化」「公共性」を重視し、団体名で表彰

選考作業は、個人賛助会員を中心メンバーとする運営委員によって「共用品推進特別賞審査委員会」を構成して行った。約2カ月余にわたる審査を経て候補事例を選出、同機構東京会議の班長会議の同意を得て最終決定した。

この度の授与先は、別表の12事例となった。上記の趣旨から、特定の個別製品・サービスや個別企業を対象とするのではなく、「取り組み事例」に焦点を当てているところに特別な意義を求めている。従って、授賞の対象はいずれも企業名でなく、団体名で表している。

事例の選定に当たっては、次に掲げる選定方針をあらかじめ設定した。

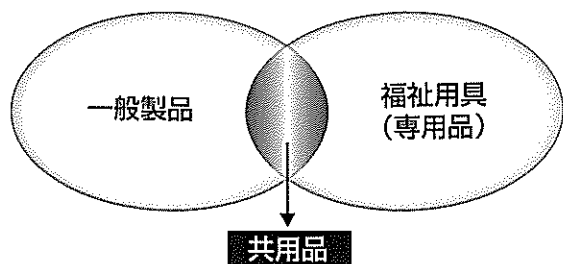
1. 共用品・共用サービスの考え方を端的に示す「象徴性」があるか、「先駆的」な事例であること

(財)共用品推進機構では、共用品・共用サービスに関して、次のような5つの原則を定義している。

- ① 身体的障害や機能低下のある人にも、ない人にも、共に使いやすくなっている製品・サービスであること
- ② 特定の障害・機能低下の人向けに開発された「専用品」でないこと
- ③ どこでも、いつでも、一般的に入手したり、利用できること
- ④ 一般的な製品・サービスと比較して、特別に高価ではないこと
- ⑤ 継続的に製造・販売・提供されていること

■共用品・共用サービスとは

障害のある人にも、高齢者にも、健常者にも、誰にとっても使いやすいように配慮や工夫が施された製品・サービスの総称。



1999年度「共用品推進特別賞」受賞事例一覧(順不同)

- 共遊玩具「小さな凸の提案」(社団法人日本玩具協会)
- シャンプー・リンス識別容器の開発・普及(日本化粧品工業連合会)
- 家電製品のバリアフリー化への取り組み(財団法人家電製品協会)
- プリペイドカード識別方式のJIS化と導入(日本鉄道サイバネティクス協議会/財団法人日本規格協会)
- 缶入りアルコール飲料への点字表記の採用(ビール酒造組合/実施酒造各社)
- ラップ製品識別マークの採用(家庭用ラップ技術連絡会)
- 公衆電話機/テレホンカードの触覚的配慮の開発・採用(NTT東日本)
- 温水洗浄便座の開発・普及(社団法人リビングアメニティ協会)
- 大活字辞書・点字絵本などのバリアフリー書籍の出版(実施出版社各社)
- 視覚障害者向け共用品開発への支援(社会福祉法人日本点字図書館)
- 食生活アクセス改善指針の提言(財団法人視覚障害者食生活改善協会)
- 字幕付きビデオの出版サービス(社会福祉法人聴力障害者情報文化センター)

2. 一般生活への「影響力」の大きさ、または「公共性」が高い事例であること
3. 「新しい市場」の創造につながっているか、あるいは「新しい価値」を加えた事例であること
4. 事業的な成果はともかく、「貴重な努力/考え方/アプローチ」が評価できる事例を尊重すること
5. なるべく多くの障害・身体機能低下の不便さ解消に寄与、あるいは関連する事例を選定すること
6. 比較的、長期にわたって取り組みが継続していること
7. できるだけ企業間の差別化を意図した独占的取り組みでなく、「標準化」の観点で望ましい事例であること。従って、なるべく「グループによる取り組み」を対象に選定する

製品・サービスのあり方や社会のしくみなどの不備について、適切な指摘・要望によって改善の動きを作り出す道もあろう。その一方で、それよりも優れた事例を顕彰することの方が良好な結果を招来しやすいとの判断もある。この点、「北風と太陽」の童話が示唆する通りであり、今回の特別賞では後者の観点から、選考を行った。

こうした選定方針のため、今回は受賞事例のほかにも優れた製品・サービス・企業の名前が候補として挙がったが、選考を見送らざるを得ないものがあ

ったことを付け加えておかなければならない。

2000年度以降は新たな基準・方式で

2000年度以降の表彰については、単独企業を対象にする表彰を視野に入れた公募制の採用など、新たな選定方法での実施を検討している。従って、こうした形での表彰は、1999年度の「共用品推進特別賞」限りのものとなり、共用品・共用サービスの歴史を刻む格別意義深いものと考えられることができるだろう。

差別化戦略を動機とした単独企業先行の事例であっても、先進的取り組みでほかの参考となる事例や、規模は小さくとも貴重な取り組みはすでに数多く存在している。これらについては、「消費者に利する」という一点さえはずしていなければ、顕彰する意義は十分にあると考えられる。

切磋琢磨が技術を進展させていくという事実も、無視できないからである。来年度以降の本賞では、そうした事例にもスポットを当てられれば、と考えている。

■問い合わせ先：(財)共用品推進機構

(TEL 03-5280-0020 FAX 03-5280-2373)

共遊玩具 「小さな凸の提案」

(社団法人日本玩具協会)

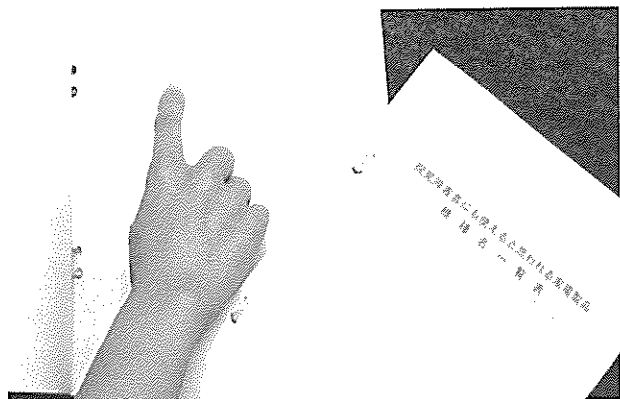


1990年3月に「小さな凸」実行委員会を発足、障害のある子もいない子も共に遊べる「共遊玩具」の普及に尽力。目の不自由な子供も一緒に遊べる玩具のガイドラインを作成し、これに基づく玩具を「盲導犬マーク」と名付け、商品パッケージに「盲導犬マーク」を表示。同様に、耳の不自由な子供も一緒に遊べる玩具に「うさぎマーク」を表示。92年には、国際玩具産業協議会が国際共通マークとして承認、英、米、スウェーデンなどでも採用されている。

共用品推進特別賞の顔ぶれ

家電製品のバリアフリー化への取り組み

(財団法人家電製品協会)



同協会の消費者政策部会・消費者関連委員会の中にバリアフリーワーキンググループを設け、96年度から3カ年計画で「家電製品のバリアフリー化ガイドライン」の完成を目指して活動。また、95年度から、視覚障害者にも使えると思われる家電製品リストの点字版(点字と墨字を併記)を作成し、関係機関に配布しているほか、99年3月には「高齢者・障害者にも使いやすい家電製品開発指針」を策定し、会員各社・団体に配布している。

シャンプー・リンス識別容器の開発・普及

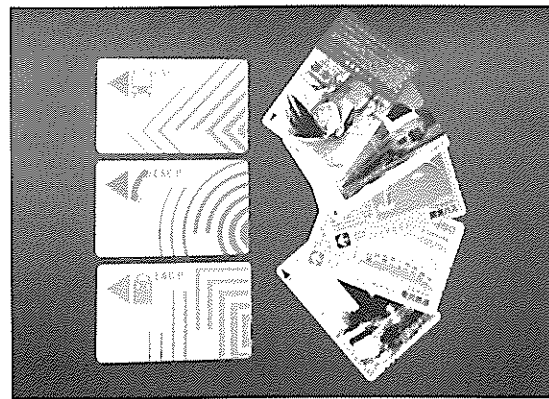
(日本化粧品工業連合会)



シャンプーとリンス製品は、一般に同じ形の容器に入っており、眼鏡が使用できない浴室で使われるために区別がしにくく、視覚障害者のみならず、多くの使用者が不便を感じていた。そこで、会員企業の発案を採用、シャンプー製品の容器の胴体部分に凹凸の「ギザギザ」を付け、触覚だけで容易に識別できる共用発想の製品の普及に、業界団体として努めてきた。98年度現在、シャンプー・リンス製品の共用品化率は約68%と高い水準となっている。

プリペイドカード識別方式のJIS化と導入

(日本鉄道サイバネティクス協議会/財団法人日本規格協会)



プリペイドカードの触覚による識別方式は、97年に日本工業規格(JIS)に導入され、現在、「テレホンカードは丸い切り欠き、乗り物系カードは三角の切り欠き、その他の買い物系カードは四角い切り欠き」という識別方式が用いられている。テレホンカードではNTTグループ各社、乗り物カードではJRグループ各社、帝都高速度交通営団、東京都交通局、札幌市、仙台市、横浜市、福岡市の各交通局などの事業体が採用している。

缶入りアルコール飲料への点字表記の採用

(ビール醸造組合/実施酒造各社)



缶入り飲料製品は、視覚障害者にとって最も識別しにくい製品の1つだが、そうした消費者の要望に応じて、缶の上ぶたに点字で「さけ」「ビール」と表記、触覚によって清涼飲料との識別を可能にした。現在、ビールではアサヒ、キリン、サッポロ、サントリーの大手各社の全製品に点字が表記されているほか、缶チューハイなどについても、宝酒造、合同酒造などのメーカーが採用、各社の裁量により次第に増えつつある。

共用品推進特別賞の顔ぶれ

公衆電話機/テレホンカードの触覚的配慮の開発・採用

(NTT東日本)



公衆電話機のダイヤル「5」への凸点、テレホンカードへの切り欠きの採用、聴覚障害者向け公衆電話機「明瞭」の設置など、バリアフリー化に早くから積極的に対応。とりわけ、視覚障害者団体・機関などからの要望に応え、1985年という早い時期に開発・採用したテレホンカードの切り欠きは、共用品の原点とも呼べる手法として、その後の他分野の製品・機器類の開発にも影響を及ぼしている。

ラップ製品識別マークの採用

(家庭用ラップ技術連絡会)



家庭用ラップ製品は、アルミホイル、クッキングシートなど同形状の紙ケース入り製品と識別がしにくいことから、98年6月からラップ製品のサイド部分に、「円の中に丸4点付きのW」を描いたシンボルマークを表示した。マークは浮き彫りとなっており、外輪の丸いことが触って識別できる。現在、実施率は出荷数量ベースで全家庭用ラップ製品の80~90%に達している。

温水洗浄便座の開発・普及

(社団法人リビングアメニティ協会)



温水洗浄便座は、元々は妊産婦、要介護の人など向けの福祉機器として開発され、その後、さまざまな改良が加えられて一般市場向けの製品となった。現在、一般家庭市場における温水洗浄便座の普及率は約36%で、福祉機器を起点とする共用品の開発・改善・市場導入のモデルといえる。操作ボタンの表示方式の統一、点字の採用、全自動化をはじめ使い勝手の改良など、各社による普及推進努力が展開されている。

大活字本・点字絵本などのバリアフリー書籍の出版

(実施出版各社)

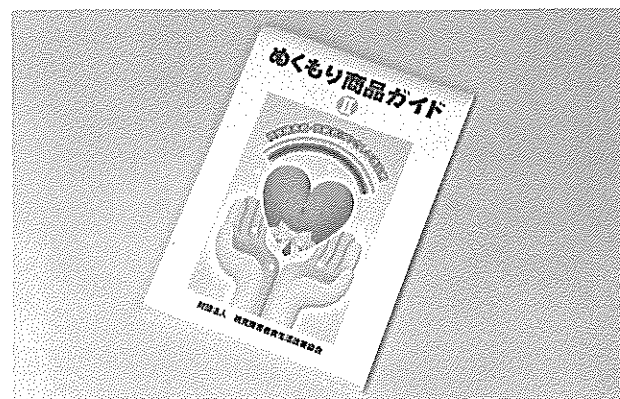


(財)日本児童教育振興財団が発行する点字絵本『テルミ』、(編)埼玉福祉会や(株)大活字、リブリオ出版などの各社が自主刊行している「大活字本」、三省堂書店や岩波書店による活字の大きい国語辞典などが代表例。出版業界による視覚障害者・高齢者の「情報へのアクセシビリティ」確保・改善に対する取り組みとして、社会全体のバリアフリーや共用品推進の意識を喚起する意味でも、重要な意義がある。

共用品推進特別賞の願ふれ

食生活アクセス改善指針の提言

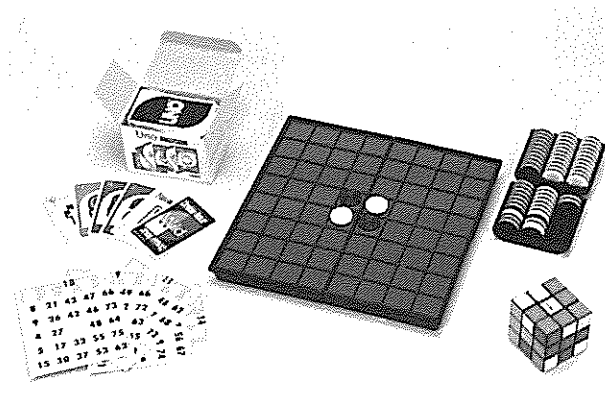
(財団法人視覚障害者食生活改善協会)



15年以上にわたって、月刊『声の食生活情報』の発行、テレホンサービスによる献立ヒントの提供など、テープ、点字、大活字による食生活改善、自立支援活動を展開。メーカー各社に対して、食品の容器・包装の識別、開けやすさ、使いやすさ、安全性への改善提案を行うと共に、食品店での買い物サポートや外食店でのサポートに関するモデルマニュアルの作成、点字メニューの推進などを、流通・外食企業に対して積極的に働きかけるなど、共用サービスの普及にも貢献。

視覚障害者向け共用品開発への支援

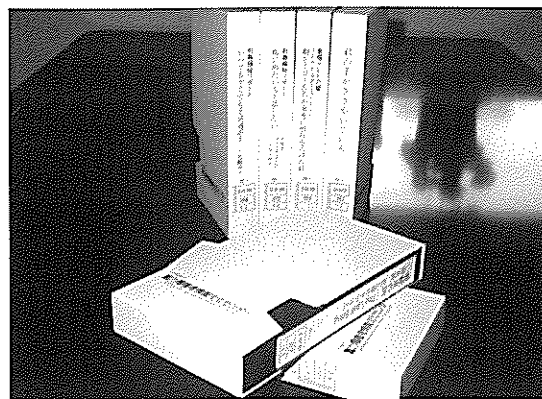
(社会福祉法人日本点字図書館)



1964年に用具事業部を発足して以来、視覚障害者向けの各種日常生活用具の販売・開発支援を継続。このことによって、共用品の開発にも数多くの参考事例や示唆を提供、多大な影響を与えてきた。現在も、視覚障害者自身によるモニタリングをはじめ、メーカー各社に対する公正で、客観的な開発アドバイスを積極的に展開している。音声で知らせるタイマーなど、視覚障害者向けの専用品から共用品に発展・成長した製品も多い。

字幕付きビデオの出版サービス

(社会福祉法人聴覚障害者情報文化センター)

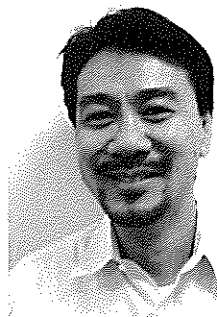


映画やテレビドラマの字幕付きビデオテープの制作・貸し出し、文字放送用の字幕の制作、要約筆記者の養成・派遣、聴覚障害者向けの各種講習会の開催など多角的な活動を展開、聴覚障害者の生活・文化面での情報アクセシビリティの改善に貢献している。特に、字幕付きビデオは、邦画やアニメのヒット作品、テレビ放映された人気ドラマなど、同センターでなければ借りられない作品も多い。

(P4~6、文・高嶋 健夫)

「共用品が開く未来展」ここが見どころ！

吉村政昭・実行委員長に聞く



今年5日から4日間の日程で、東京・銀座のソニービル8階ソミドホールで「共用品が開く未来展」が開幕する。今回で4回目、共用品推進機構

になって初めてとなる今展示会の狙いや見どころについて、前回までと同じく実行委員長を務める吉村政昭さん(個人賛助会員、(財)共用品推進機構運営委員、(株)NLP代表取締役)に聞いた。(聞き手は高嶋 健夫)

——今回の特徴は？

「2点ある。1つは、原点に戻って、『共用品とは何か』をわかりやすく紹介することに改めて力を入れたこと。もう1つは、タイトルにある通り、今まで以上に未来を見つめて、共用品の可能性を強く意識した展示にしたことだ」

——今回は企業人を主な対象にしているが……。

「前回まではなかった展示として、開発のプロセス、ノウハウを解説するコーナーを設けるなど、共用品・共用サービスをビジネスとして展開するのに役立つ展示を行っている。シャンプー・リンス、温水洗浄便座の開発過程を解説するパネルをメーカーの協力によって作ったほか、共用品開発のヒントになる消費者の不便さと改善の工夫についても、イラストなどでわかりやすく紹介している」

——消費者として見ても、楽しいのか。

「もちろんだ。特に障害者の方々の中には、前身であるE&Cプロジェクトをよくご存じの方が多いだけに、その方たちのご期待を裏切るようなことはない。今回も、『共用品推進特別賞』の受賞事例をはじめ、共用品の実物を100点以上展示するので、今までと同様、実際に手にとって試してみることができる。また、ハイテクコーナーでは、21世紀の共

共用品が開く未来展
共用品から「共用品」まで
会場 銀座ソニービル 8F ソミドホール
会期 1999年11月5(金)6(土)7(日)8(月)
開場時間11:00~19:00(但し最終日18:00閉場)
入場料 無料
共用品が開くビジネス未来シンポジウム開催
会場 リクルート館8ビル11階ホール
会期 1999年11月8(月)
13:00~18:30
シンポジウムのお申込みは、詳しくはP.12
(財)共用品推進機構事務局
(Tel)03-5280-2273 にお問い合わせ下さい。

主催 (財)共用品推進機構
後援 (協賛) 通商産業省・厚生省・農林水産省・運輸省・建設省・(財)2000年日本実業博覧会協会・(株)NTT
©1999 (株)NLP

用品開発に役立つような最新のテクノロジーのデモンストレーションも行う。是非、ご自分で試してみ、どんな方向に利用できそうか、ご意見を聞かせてほしい」

——来場者に一番訴えたいことは？

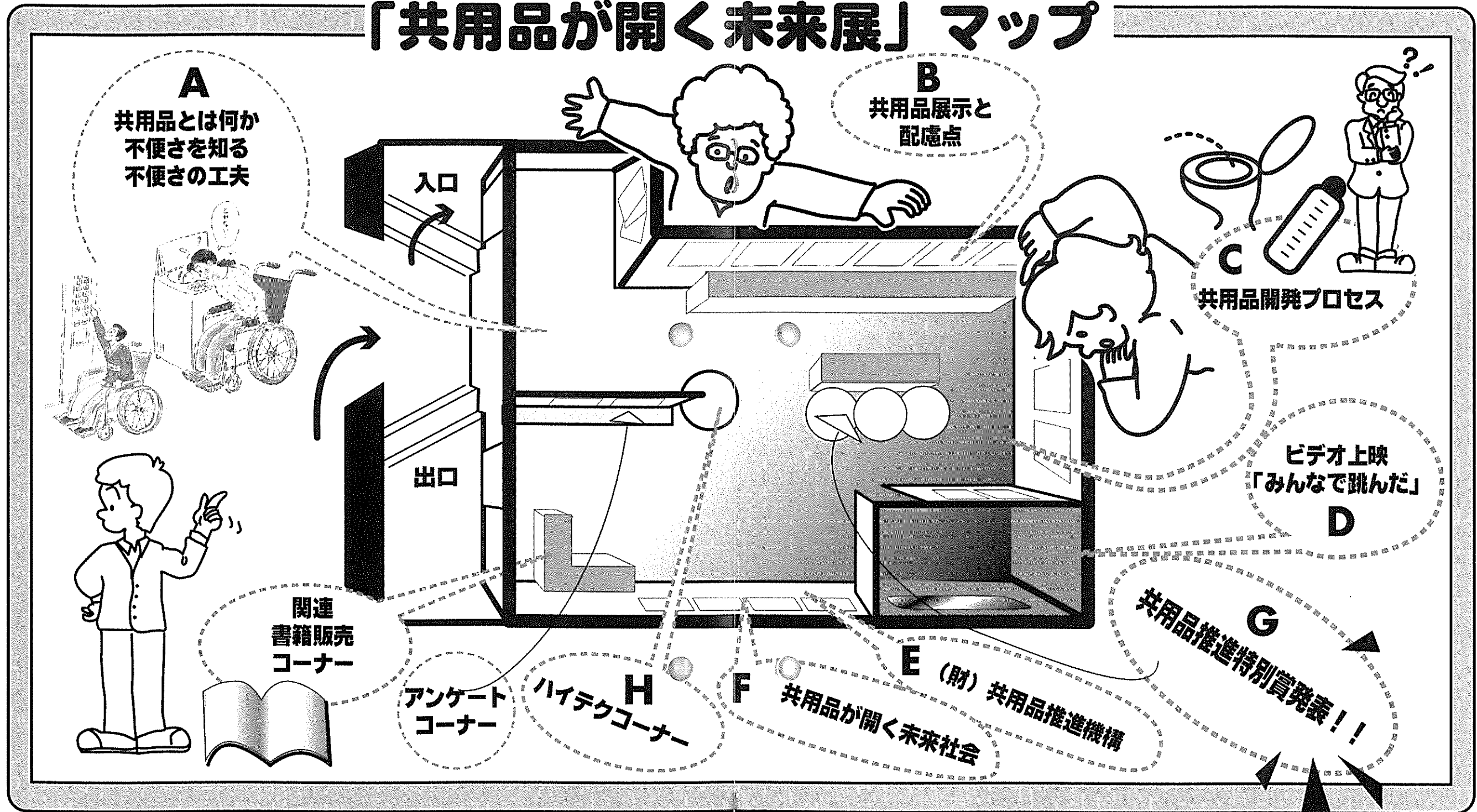
「前回までは、まだ『共用品を知ってもらう』ことが主眼だった。今回はそれから一歩踏み込んで『共用品を作ってもらう』ことを訴えたいと考えている。ただ、そのためには、モノ作りの背景にある『心』の部分を理解してほしい。『ちょっとした配慮』が、独りよがりだったり、大げさだったりしては何にもならない。そこをどう訴えるか、そして、それが来場者にきちんと伝わるかがポイントだろう」

——自信のほどは？

「自分としては、『未来が少し見えてきた』という手応えを感じている」

■「共用品が開く未来展」マップ (イラスト: 西川 菜美)

Kyoyo-Hin 「共用品が開く未来展」マップ



A. 共用品って何？
 障害者・高齢者の不便さを知る
 障害のある人が行っている工夫を知る
 こんな工夫がお店に売ってれば…。

B. 共用品の展示と配慮について
 現在市場にでて販売されている共用品・共用サービスです。

C. 企業の共用品開発プロセス
 共用品開発の実例を公開。

D. ビデオ上映「みんなで跳んだ」
 子どもたちが、一生命命答えをだしました。

E. (財) 共用品推進機構の活動と役割
 E&Cプロジェクトから財団法人共用品推進機構になり活動の幅が広がりました。

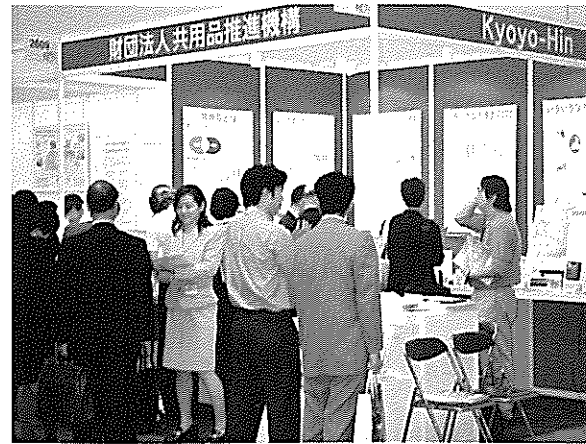
F. 共用品が開く未来
 日本から発信しつづけるKyoyo-Hin。
 素敵な未来を創りましょう！

G. 共用品推進特別賞 発表
 今年度は、次の方針に基づいて受賞事例を選定しました。
 ・共用品の考え方を端的に示す「象徴性」があるか、「先駆的」である。
 ・一般生活への「影響力」が大きい又は、「公共性」がたかい。
 ・「新しい市場」の創出あるいは、「新しい価値」を加えている。
 ・成果はともかく、「貴重な努力/考え方/アプローチ」が評価できる。
 ・なるべく多くの障害に寄与あるいは、関連している。
 ・比較的、長年に亘って取組みが継続している。
 ・独占的取組みでなく、「標準化」の観点で望ましい。
 ・したがってなるべく「グループによる取組み」を対象とする。

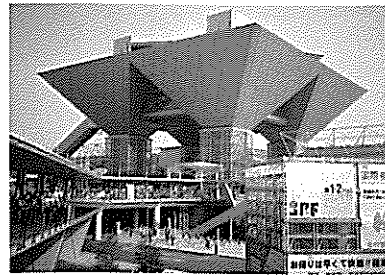
H. 共用品を生むニューテクノロジー紹介

国際福祉機器展で「共用品」をアピール 共用品推進機構ブースに4000人

(財)共用品推進機構は、10月13～15日の3日間、東京・有明の東京ビッグサイトで開かれた「第26回国際福祉機器展」に初参加、独自ブースを開設した。公的機関・団体が出展する東3ホールに設けたブースには、期間中4000人以上の見学者が立ち寄り、熱心に共用品・共用サービスの実物やパネル展示に目をやっていた。(高嶋 健夫、写真も)

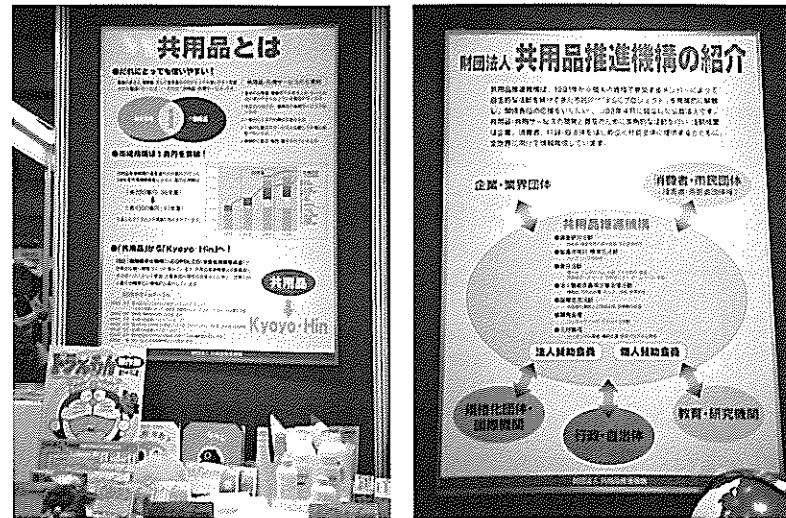


■小さいながらも、にぎわいを見せた共用品推進機構ブース。展示した共用品を実際に手に取る見学者が数多く見られた。



■会場の東京ビッグサイト(下)。機構ブース前では、いまや共用品推進機構のシンボルキャラクター的存在になりつつあるドラえもんも、元気に来場者をお出迎え(上)。

■5枚のパネルで、共用品・共用サービス、共用品推進機構の概要、障害者・高齢者の不便さなどをわかりやすく紹介。



「マトリックス」の利用法・目的を明記 次回は来年2月に開催

ISOコボルコ・トロント会議・速報

高橋 玲子 (個人賛助会員、(株)トミー勤務)

共用品・共用サービスの世界統一規格作りの検討を進めているISO(国際標準化機構)／COPOLCO(コボルコ：消費者政策委員会)の「障害者・高齢者ワーキンググループ(WG)」の会合が、先月はじめにカナダ・トロントで開かれた。今回は、5月にアメリカ・ワシントンDC郊外で開いた前回会合での合意に基づき、「ガイド」文書の作成検討が行われた。前回に引き続き、(財)共用品推進機構からオブザーバーとして参加した高橋玲子さんに会議の様子をレポートしてもらった(なお、前回までの経緯については、『インクル』創刊号を参照されたい)。

去る10月1日と2日の両日、カナダ・トロントのウェスティン・プリンス・ホテルを会場に、ISOコボルコの障害者・高齢者ワーキング・グループ会議が開かれた。出席者はカナダ、イギリス、スウェーデン、オランダ、南アフリカ、ANEC、日本からのメンバーやオブザーバーの計13人。

1日めの午前中には、アメリカ(ANSI)のメンバーも、電話で会議に参加した。

議題は前回に引き続き、コボルコ総会に提出する「ガイド」文書の作成。「ガイド」は、すでに基本合意している「政策宣言」とともに、最終的にISOとIEC(国際電気標準会議)に提出したのち、「ISO／IEC文書」として加盟各国に承認される基本文書であり、「政策宣言」に従い、製品・サービス開発にあたって高齢者や障害者に配慮すべきポイントを具体的に示すもの。「簡潔で読みやすいガイドであること」を第一条件に、前回から作成を開始した「マトリックス」と、それに即したガイドの構成を検討した。

マトリックスは、横軸に障害、縦軸に製品・サービス・環境など配慮すべき対象の種類が記された一覧表になっているが、現時点でのたたき台は非常に冗長かつ内容の繰り返しが多いことから、その簡略化に取り組んだ。

今回の会議によって、ガイド本体に、このマトリックスの利用法として、

1. (商品、サービス、および環境の設計者、規格制作者には)横軸に記載されたすべての障害(要素)についての検討が望まれる
2. (設計者、規格制作者は)縦軸に記載された配慮の種類のうち、どれが検討を要するものであるかを特定する
3. 検討を要する配慮の種類が特定できたら、その欄の横軸上に記載されたすべての配慮ポイントを参照する
4. この手順により、どのような配慮が検討されるべきなのかが明らかになる

というインストラクションが付記されることになった。

今回の会議(来年2月末ごろに開催予定)までに、このマトリックスのとりまとめをスウェーデンが中心となって行い、各障害(要素)の最終的な定義を各国が分担して行うことになった。

日本は事務局として、すべてのまとめ作業を担当する。マトリックスおよびガイド本体の検討は、インターネットによってメーリング・リスト上で意見交換しながら進めていくことになっている。

また会期中、1日めの午後には、会場近くにある「老化研究センター(The Centre for Studies in Aging)」と、障害児のリハビリと補助具の開発を行っている「ブルビュー・マクミラン・センター(The Bloorview Macmillan Centre)」の見学会が実施された。

ここでは、高齢者が転倒する時のメカニズムを研究するための床が動く実験器具や、使いやすくデザインに優れた車いす、縁がイスのように張り出し、つかみやすい板になっていて、休みながら入浴のできるバスタブ等、アイデア満載の器具や補助具をたくさん見ることができ、大変有意義な見学会だった。

『ドラえもん、車いすの本』、小学館から刊行

子供たちに、「共に生きること」を伝えたい

森川 美和 (財) 共用品推進機構事務局

(財) 共用品推進機構が編集した『ドラえもん、車いすの本』(本体価格1260円、税別)が小学館から刊行された。前身のE&Cプロジェクト時代から編集に当たってきた「小学館バリアフリーブック」の第5作目。子供たちに、車いす使用者の日常の不便さと、共に生きることの大切さをわかりやすく伝えようと、「北斗くんのいす(写真絵本)」「ドラえもん、空飛ぶ車いす(まんが)」「いっしょに歩いてみませんか(データベース編)」の3部立てで構成している。

昨年6月、街の木々たちが元気に芽吹き始めた頃、東京・神田一ツ橋にある小学館の一室で、編集会議が行われた。

旧E&Cプロジェクトの車いす使用者班が、1998年7月に全国脊髄損傷者連合会の協力を得てまとめた「車いす使用者の日常生活の不便さに関する調査報告書」をもとに、「子供たちが、車いすの人たちの日常の不便さを知り、そのうえで自分にできることは何かを考える絵本を作るには、どのような構成にすればよいか」がテーマだった。

ここ数年、書店で「車いす」に関する本を見かけることが多くなってきた。だが、残念なことに、子

供たちにもわかるような本は、それほど多くない。

未来を担う子供たちに、いろいろな人がいること、そして共に生きていくことを、もっと身近に感じてもらいたいという思いを、編集に携わることになった誰もが抱いていた(もちろん、この思いは共用品推進機構のメンバーの誰もが持っていると思うが)。

ドラえもん、編集者の「思い」を託す

「車いす使用者の日常生活を知る」という、児童書ではほとんど未開拓の分野を表現するのに1番適している方法は、一体何なのか?

皆、頭を捻った。すると、編集者の1人が何か聞いたように、「ドラえもんがいい。ドラえもんなら、きっと思いを伝えてくれる」といった。

まさに適役である。本当にそうならば、どんなに嬉しいことか。皆、しばし、絵本になったドラえもんの姿に思いを廻らした。ドラえもんは誰からも親しまれ、愛される国民的人気のキャラクターである。しかし、それだけに、各界から引っ張りだこで、大忙しだ。おまけに、今年は生誕30周年にあたり、突然「お願いします」といわれても、さすがの人気者も困ってしまうに違いない。無理を承知で、生みの親である藤子・F・不二雄プロを訪ねた。

視覚障害のある子供たちばかりでなく、一般のドラえもんマニアの間でも話題となっている。

(財) 共用品推進機構もドラえもんとのご縁は深く、前々回の共用品展では、藤子プロほか関係各位のご協力によって、つげただけで手話ができる「シュワッチグローブ」など“夢の共用品”のパネルを展示。前回の「バリアフリーは銀座から」展では、『ドラえもん、車いすの本』のカバーにも使われた等身大モデルを制作、イメージキャラクターとして起用している。(高嶋 健夫)

ドラえもん、共用品の世界でも大活躍!

初登場から今年で30年目を迎えたドラえもんは、共用品の分野でも人気キャラクターとして大活躍している。

7月には、音声による指示でテレビのチャンネルを切り替えてくれる「ドラえコン」(エポック社、6980円)が登場。注文待ちとなるほどの大ヒット商品になっている。9月には、小学館から初の大字コミック『のび太の恐竜』(2800円)、『ドラえもん傑作選』(1800円)が刊行された。A3判に22ポイントのゴシック体で印刷された大迫力に、

あなたの心の中に「車いす」はありますか?

『ドラえもん、車いすの本』カバー見返しより

みんながいっしょに生活するには、どうしたらいいのでしょうか?

みんなでいっしょに楽しむには、どうしたらいいのでしょうか?

この本の中に登場する、北斗くんや南まりちゃんは、あなたに少しだけヒントをくれます。

でも、答えは教えてくれません。

なぜでしょう?

それは答えは一つではないからです。

あなたが、心の底から北斗くんやまりちゃんとお友だちになってふれ合うなかで、見つかった方法が答えなのです。

いつもいっしょの方法や答えとは限りません。

いつも、ちがうのです。

ちがって当たり前なのです。

どのように接してよいか分からない時は、思いきって聞きましよう。

「何か手伝うことはありますか?」

きっと何かが見つかるはずですよ。

忙しいにもかかわらず、藤子プロの方々は、私たちの活動に十分に理解を示され、一緒にこの新しい本を生み出すことに力を注いでくださることになった。

ドラえもんの漫画シリーズで、「車いす」が登場したことは、いまだかつて1度もない。それだけに、車いすを漫画として表現することには、相当な労力を遣われたに違いない。

こうして、ドラえもんの世界に、初めて「車いす」が登場したのである。

四肢障害のある少年の生活と笑顔をカメラに

一方、写真絵本の章では、同じ小学館バリアフリーブックの『“音”を見たことありますか?』(E&Cプロジェクト編、97年刊)の「ゆいちゃんのいる教室」で、聴覚に障害のある少女の姿を等身大で生き生きと撮った写真家・星川ひろ子さんが、今回も



あなたの心の中に「車いす」はありますか? 今度は自分が座ってみましよう。気持ちのよい「車いす」ですか? この本を読んでくださった方々の心の中には、きっとすてきな「車いす」があると信じています。

撮影を担当して下さった。

今回は四肢障害のある少年、石川北斗君の日常を、カメラに収めた。車いすの子供たちがぶつかる壁も、悲しみも、いつかは乗り越え、笑顔に変わることを「北斗くんのいす」では描いている。

心が引き込まれる“モノやこと”が生まれる背景には、いつもたくさんの人々の愛情がある。必ずしも同じ意見ばかりではなく、たくさん意見が交差する。時には、すれ違うこともある。しかし、目指すところが同じであれば、きっといつかは現実になる。

この本が、子供たちに「自分と違う誰かと共に生きていくこと」について、少しでも考えるきっかけになれば、と願ってやまない。

問い合わせ先: 小学館第七編集部

(TEL 03-3230-5453 FAX 03-3230-2527)

「共用品とコンセプト」

ことし よしかず
後藤 芳一 (個人賛助会員、日本福祉大学兼任講師)

今回は、共用品・サービスに関わりのあるコンセプトを見ていこう。

1. 目的 (共用品の普及を通じてめざすもの)

1950年代にデンマークで生まれた「ノーマライゼーション」の理念は、元々の知的障害の分野から、高齢者や児童を含む、福祉の全分野に共通の基本理念になった。

リハビリテーションの分野では「更生」から「自立」へ、さらに60年代のアメリカでの「自立生活 (IL = Independent Living) 運動」もあって、「ADL (Activities of Daily Living = 日常生活動作) の自立」から、「自己決定」を重視した「QOL (Quality of Life = 生活の質)」へと、目標が変化している。

障害教育では、「分離」から「統合教育 (インテグレーション)」、「包括 (インクルージョン)」という新しい理念が生まれた (本誌の名前「インクル」も、これがヒントになった)。

それとともに障害者観は、「差別と偏見」から「憐れみと同情」、「共に生きる (共生)」、「障害は個性」へと変化しつつある。共生はノーマライゼーションの基盤であり、インクルージョンはさらに積極的な意味を持たせている。

2. 取り組みの方向 (アプローチの手法や視点)

「アクセシブル」が60年代のアメリカで建築障壁を除くとの考え方で提唱された。同義の「バリアフリー」は74年の国連関係の報告書で取り上げられ、わが国では80年代以降に機器や交通を含む広い概念となった。「アダプティブ」や「アジャスティブ」は障害者のニーズを織り込んで設計すること。

90年にアメリカで提唱された「ユニバーサルデザイン」は、すべての利用者にバリアを作らない設計思想。「フォーオール (for all)」といういい方もある。

「共用品・共用サービス」はこれに近いが、さらに加えてバリアの除去もめざす。「エイジレス」、「エイジフリー」、「生涯道具」は年齢による障壁を生じないとの考え方。

3. 具体的な手法 (実現の手段=共用品以外のもの)

機器は、身体機能を代行・補完する「補装具」、自力での日常生活を援助する「自助具」、「介護機器」などと、それを包括する「福祉用具」(「テクニカルエイド」も同義)は、高齢者・障害者専用の性格が強い。通産省はこれを「福祉用具 (狭義)」とし、ここへ共用品を加えたものを「福祉用具 (広義)」としている。

利用環境のうち、住居の設計では「アダプタブルハウジング」、改善は「住居改善」や「バリアフリーリフォーム」、これらの手法は「ウェルフェアテクノハウス」で研究されている。公共空間は「ハートビル」法認定建築物や、「福祉のまちづくり」への取り組みがある。

また、サービスのうち、交通では、障害者向けが中心の「ハンディキャブ」や欧州の「STS (= Special Transport System)」があり、高齢者向けが中心のものとしては、イギリスにおける「ショップモビリティ」が、わが国に「タウンモビリティ」として紹介された。これらはいずれも専用性を持つバリアフリー対応であり、この分野としては「超低床」や「ノンステップ」が共用のアプローチになる。

次の2000年1月号 (創刊第4号) は、通常通り、1月15日に発行いたします。次号では、新たにまとめた「高齢者の家庭内での不便さ調査」「弱者の日常生活での不便さ調査」の2つの報告書の概要を特集するほか、共用品・共用サービスに関する最新の情報を幅広く掲載する予定です。ご期待ください。

■お断りと次号 (2000年1月号) のご案内

今号は、「共用品が開く未来展」の開催に合わせ、発行日を繰り上げるとともに、同展関連特集を中心とする特別編集といたしました。このため、「シリーズ・Kyoyo人」「ザ・レビュー」は休載いたしました。



ほほえみ
インクルの微笑み

ラフカディオ・ハーンが愛用した特注机

(いずれも写真提供：小泉八雲記念館)

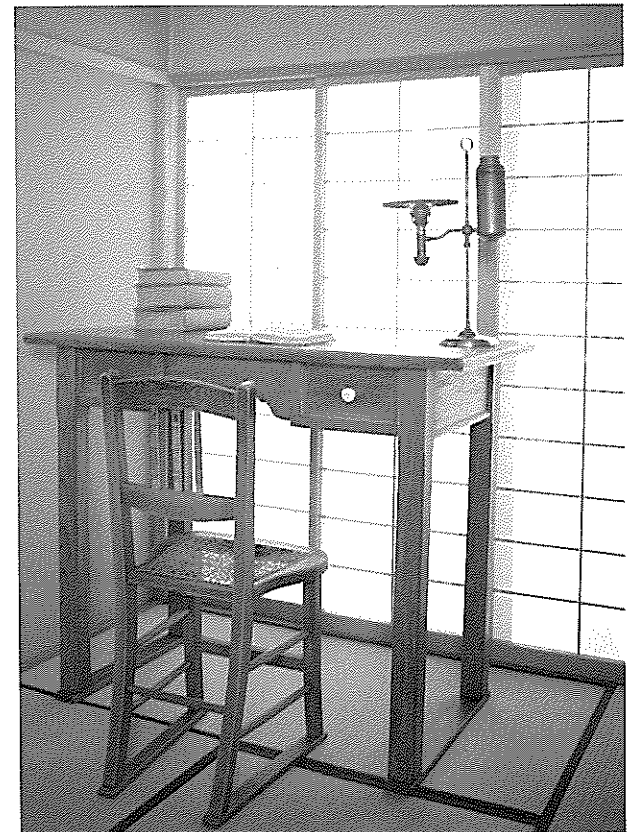
夢が叶い、再び、松江を訪れることができた。8月27日。初めての訪問からちょうど丸10年目の同日、小雨の降る中を、市内塩見縄手にある小泉八雲記念館に向かった。ラフカディオ・ハーン、日本名小泉八雲が生前、愛用していた「特注机」に再会するためである。

ハーンは生まれつきの弱視であった。しかも、10代半ばで事故によって左目を失明、眼球を摘出し、その後の波乱に富んだ生涯を、視力の乏しい右目だけを頼りに乗り切ったのである。

記念館には、そんなハーンが日本に来てから注文して作らせた机とすが大切に保存、展示されている。一見しただけでは気づきにくいのが、よく見ると、机に対して、いすの座面が極端に低い。そう、ハーンはこの異様に低いいすに座って、顔を机上の原稿用紙に擦りつけるようにして、精神的に執筆活動を続けたのである。今なら、拡大読書器や、音声ソフトや拡大表示ソフトが使えるパソコンで、弱視者でも楽に原稿を書くことができる。だが、明治20年代の当時、いすの座面を低くすることぐらいが、ハーンにできるバリアフリーの工夫だった。

同記念館顧問で、県立島根女子短期大学専任講師の小泉凡先生に、お話を伺った。ハーンの曾孫にして、ハーン研究の第一人者である凡先生は「八雲の作品は、耳で書いた文学だと思います」と、弱視にまつわる様々なエピソードを語ってくれました。

特に心に残ったのは、ハーンはスナップ写真が好きだったという逸話。まだ写真館まで撮りに行かなかったあの時代に、自分や妻セツ、愛する子供たちの写真を数多く撮っていたという。友人たちの写真もたくさん持っていた。「自分自身や家族、友人がどんな顔をしているのか、よほ



ど確かめたかったのですね」と、凡先生。

松江で最初に宿泊した旅館の老女中が目が悪いと知り、眼の神様である一畑薬師と一緒に参拝し、老女と自身の快癒を祈願したこともあったそうだ。ハーンは繊細で、心優しい人だった。

1時間以上も取材に付き合ってくれた凡先生に礼を述べ、記念館を辞した。それから、隣接する「ヘルン旧居」を、1人で訪ねた。

10年前にここに来た時、私はまだ暗眼者だった。松江への旅行から2カ月半後、突然の眼病を得て、私はハーンと同じ弱視になった。その時以来、やってみたく「小さな夢」があった。それは、ハーンが暮らしたこの旧家を再訪し、ハーンが愛した枯山水風の小さな庭園を、もう1度眺めること。

私は縁側に座り、度付きの「弱者用色眼鏡」をはずして、庭に目をやった。そして、あらかじめ考えておいたセリフを、心の中でつぶやいた。

「ふむふむ、なるほど。ハーンはこの景色を愛してやまなかったのか」

私は、ちょっと得意だった。

(文・高嶋 健夫)

『インクル』からのお願い

☆個人・法人賛助会員を募集しています！

(財)共用品推進機構では、共用品・共用サービスの普及と誰もが暮らしやすいバリアフリー社会の実現に共に取り組んでくださる個人・法人賛助会員を募集しています。いずれも『インクル』『共用品推進機構だより』の定期購読など情報提供サービスを受けられるほか、さまざまな特典があります。年会費は、個人が1人1万2000円、法人が1口20万円。お問い合わせは、事務局まで、お願いいたします。

☆企業や団体からのニュース提供をお待ちしています！

『インクル』は共用品・共用サービスの専門情報誌です。新製品の発売、新サービスの提供開始、新技術の開発、展示会やイベントの開催、常設展示場の開設——共用品・共用サービスに関するニュースリリース、カタログ、パンフレット、広報誌などの資料をお寄せください。ご連絡は、下記の事務局『インクル』編集部まで。

☆個人からの寄稿・投稿も大歓迎！ お待ちしています！

『インクル』は消費者と企業をつなぐ架け橋です。「バリアフリーサービスの素敵なお店」「心のバリアフリー体験談」「海外ユニバーサルデザイン事情」などなど、個人賛助会員の皆様の声はもとより、法人賛助会員の読者の方々からのご意見もお待ちしています。宛先は下記の事務局『インクル』編集部まで。お手紙やはがきのほか、FAXや電子メールでも結構です。

☆広告の出稿もお待ちしています！

『インクル』は共用品・共用サービスの普及を担うオピニオン・リーダーにお届けしています。共用品・共用サービスの普及促進に寄与し、『インクル』の情報価値を高めるために、出広媒体としてもご活用いただければ幸いです。99年度の広告料金表は事務局にご用意していますので、お問い合わせください。

作る人と使う人の共用品情報誌

インクル

創刊3号

1999(平成11)年11月1日発行

"Incl." vol.1 no.3

©The Kyoyo-Hin Foundation,1999

隔月刊、奇数月に発行

頒価 1部1000円

※視覚障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはTXTファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構

郵便番号101-0064

東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル8F

電話：03-5280-0020

ファクス：03-5280-2373

Eメール：jimukyoku@kyoyohin.or.jp

ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子

事務局 星川 安之

森川 美和

編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 齊木 誠

(五十音順) 小塚 通宏

後藤 芳一

高橋 玲子

西川 菜美

橋本 英和

牧内 智子

山本 明彦

吉村 政昭

制作 日経BPクリエイティブ

印刷・製本 光写真印刷(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。